東京音楽大学付属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	ルーマニアにおけるパンフルートの歴史・19世紀からの民族楽器ナイとしての発展〜アンゲルシュディニクとクラチュネスクに焦点を当てて〜
Title in another language	History of Pan Flute in Romania - History as a folk instrument Nai from the 19th century- Focusing on two pan flutists Angelus Dinicu and Craciounescu
Author(s)	櫻岡史子 (SAKURAOKA Fumiko)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 12, p. 15-32
Date of issue	2022-03-30
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	https://tcm-minken.jp/publication/IE_B12202202.pdf

ルーマニアにおけるパンフルートの歴史•19世紀からの民族楽器ナイとしての発展
～アンゲルシュディニクとクラチュネスクに焦点を当てて～

History of Pan Flute in Romania
—History as a folk instrument Nai from the 19th century—
Focusing on two pan flutists Angelus Dinicu and Craciounescu

櫻岡史子　SAKURAOKA Fumiko

パンフルートは世界最古の楽器の一つとされる。旧約聖書に、ユバルが最初に吹いた楽器としてその名が見られる。ギリシャ神話の中に登場する牧神パンが吹いていたとされる楽器だ。ダフニスとクロエの恋愛物語にも登場し、様々な形状のパンパイプを世界各国で見ることができるが、ルーマニアでは民族楽器「ナイ」として演奏されてきた。ヨーロッパでは長く忘れ去られていたパンフルートが、ルーマニアでどのように民族楽器「ナイ」として認識され、19 世紀からどのように発展してきたか、アンゲルシュディニクとクラチュネスク 2 人のパンフルート奏者に焦点を当てて紐解いていく。

キーワード : パンフルート　Panflute、パンフルート奏者　Panflutist、
ルーマニア　Romania、ゲオルゲ・ザンフィル　Gheorghe Zamfir

１．はじめに

パンフルートは世界最古の管楽器の一つと言われ、旧約聖書にその名が見られ、ユバルが最初に吹いた楽器とされる。古代ギリシャ時代には、ギリシャ神話の中に登場する牧神パンが吹いていたとされる楽器だ。様々な形状のパンパイプがヨーロッパ、南米、アフリカ、アジアを始め世界中に存在するが、ルーマニアでは、民族楽器「ナイ」として演奏されてきた。ルーマニアでは、18 世紀に入り 1726 年にパンフルートが初めて文献に登場する。王侯貴族を中心に、その後ラウタリの音楽として庶民にも浸透していった歴史がある。1854 年に初めてナイ奏者の名前が文献に登場する。その名はアナスタンセ Anastase（Muscalagiul）である。今までラウタリの演奏で用いられてきたナイは、あくまでもヴァイオリンなどの伴奏楽器としての役割を担っていたが、19 世紀に入ってナイ奏者に対しての注目が高まり、高音域や哀愁漂う音色を演奏し、伴奏楽器として役割を担ってきた楽器が人々を魅了しソリストとしての存在感を放つようになった。1889 年のパリ万博でのナイ奏者の金銀賞の獲得をきっかけに人気が高まり、1890 年には、民族音楽にとどまらず、オペラの幕間でクラシックでも演奏された。ルーマニアの女王エリザベタの存在がナイの人気を後押ししていたのである。ヨーロッパでは長く忘れ去られていたパンフルートが、ルーマニアでどのように民族楽器「ナイ」として認識され、19 世紀からどのように発展してきたか、アンゲルシュ・ディニクとクラチュネスク 2 人のパンフルート奏者に焦点を当てて紐解いていく。

２．18世紀のパンフルートの歴史

ルーマニアの民族楽器である「ナイ」の 18 世紀からどのように民族楽器として根付いていったか、今まで明らかにされてこなかった。前回の研究によって、王侯貴族の娯楽として愛され、その後、庶民の中でもラウタリの楽器として広く演奏されてきたことが分かった。18 世紀の前半から、すでに他国と比較しても高い演奏技術を持っており、外国からの多くの旅行者が目にしていることが明らかになったのである。

２−１．古い教会にあるパンフルート奏者の壁画

1787 年に建設されたワラキアのロマナス県（現：オルテニア）にある教会には、とても珍しい壁画が残されている。洗礼者ヨハネを殺害した時の場面が描かれており、ラウタリである 2 人のヴァイオリン奏者とナイ奏者が演奏する姿が描かれている。［C.BOBULESCU: 1940］

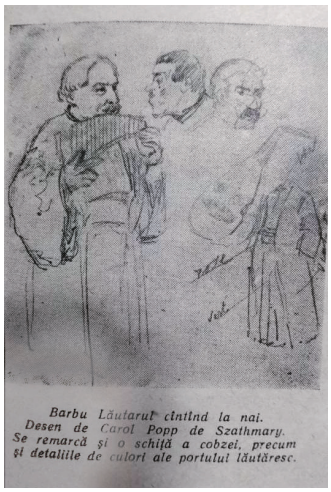
Fig 34. — Doi lăutari unul cu vioara şi altul cu naiul, cîntă la masa lui Irod, pe cînd Salomeia aduce capul Sfîntului Ioan Botezătorul. Pictură din 1787 [2]), din biserica satului Ostrov, comuna Greci judeţul Romanaţi.

写真提供：ルーマニア国立図書館

この壁画は、ルーマニアには一つしかない貴重なものである。ロシア在住であったフランス人アレクサンドル・デ・ランジェロ Alexandru de Langeron (1765-1831) によると 1791 年にロシアの観光客がモルドバとムンテニアを訪れた際に、教会でロマの演奏を聴いている。ヴィオラ、ヴァイオリン、そしてパンフルートを演奏しており、8 管のパイプで唇の下に置いてある楽器を使用して演奏している。教会で演奏しているロマ達は観客を満足させていた［GHEORGHE G.: 1947］と述べている。当時、教会の壁画としてパンフルートが描かれ、教会で演奏するほどラウタリの人気が高かったと考えられる。

２−２．王侯貴族達に愛されたパンフルート

18 世紀から 19 世紀にかけて、パンフルートは王侯貴族達に愛され発展してきた歴史がある。貴族達はロマの音楽家達を雇い娯楽として楽しんでいたのである。旅行記やジャーナリズムで有名な貴族のディニク・ゴレスク Dinicu Golescu(1777-1830) は、新しいもの好きであった。ルーマニアの音楽学校を作り、12 名のロマ音楽家を雇っていた。［Lahovari: 1898 : 742］さらにルミニク出身の貴族のアレク・ニクレスク Alecu Niculescu は、6 名のロマの音楽家を雇い、そのうちの 3 人はギタリスト、2 名のギタリストは首からムスカル（パンフルート）とナイ（パンフルート）を下げて演奏していたのである。1 名はマンドリンを弾きながら、フルィエルデパンを吹いており、6 人目は手でツィンバロンと



Barbu Lăutarul cîntînd la nai. Desen de Carol Popp de Szathmary. Se remarcă şi o schiţă a cobzei, precum şi detaliile de culori ale portului lăutăresc.

写真１：バルブ・ラウタル
写真提供：ルーマニア国立図書館

口でナイ、足でドラムを叩いていた［Lahovari: 1898］とある。19 世紀の初めに活躍しており、その中で最も有名だったのがバルブ・ラウタルだった。［Teodor: 1907］彼は、コブザ、ヴィオラ、そしてナイも演奏しており、ナイ演奏している場面を描いた絵が残されている。バルブ・ラウタルは、ルーマニア民謡にもその名が見られるなど、当時の活躍ぶりが伺える。

３．19世紀におけるパンフルートの演奏

19 世紀におけるパンフルートは、海外からの旅行者によって様々な場面で記録されており、ラウタリの演奏によって発展してきたことが分かる。

ジャン・ヘンリー・ウビチニ Jean Henri Abodolonyme Ubiconi によると、1846 年のロマオーケストラは、ヴィオラ、ナイ、コブザで演奏しており、リーダーはヴァイオリニストである。ナイは高音域や哀愁漂う音色を鳴らし、いつもヴァイオリンと一緒に演奏されている。［Daniela: 2010］ラウタリによって演奏されたナイは、19 世紀には、宮廷での娯楽にとどまらず、それぞれ地域に定着し、人々の暮らしをより豊かなものにしていたのである。

３-１．地域に根ざしたラウタリとパンフルート奏者達の活躍

1854 年にフランス人のアルフォード・ポイショネ Alfred Poissonnier は、ブカレストを旅した。ワラキアとモルドバには、多くのラウタリ達が活躍しており、彼らは結婚式や家族のパーティーに招かれたのである。彼らの音楽は、心の痛みを忘れさせる。ルーマニアのバラーダを思い出させる。バラーダはルーマニアの魂である。ラウタリ達はルーマニアの先祖達に思いをはせ、誇りを感じている。それはラウタリの楽器であるナイとコブザ、ヴィオラで演奏されている。［Daniela: 2010］ラウタリの音楽家達は、それぞれの地域に移り住み、演奏を行い、地元の有名人になったのである。例えば、ボウリャン Boulean、イオニカ Ionica、ドミトラキエ Dumitrache、オキアルビ Ochialbi がブカレストでは人気があった。同じく 1854 年に初めてナイ奏者の名前が登場する。その名はアナスタンセ Anastanse（Muscalagiul）である。アナスタンセは、天才的でとても愛されていた。［Daniela: 2010］と述べられている。今までラウタリの演奏で用いられてきたナイは、あくまでもヴァイオリンなどの伴奏楽器としての役割を担っていたが、19 世紀に入ってナイ奏者に対しての注目が高まっていることが伺える。

絵画１：タラフ オキアルビ Ochialbi
ナイ奏者 アンゲルシュ・ディニク Angelus Dinicu
提供：ルーマニア国立図書館

3-2．パリ万博におけるパンフルート奏者の活躍

ラウタリはルーマニアの展示委員会によってパリに持ち込まれ、シャン・ド・マルスの国家委員によって設置されたステージで毎日、毎晩演奏している。オリジナリティに溢れた演奏によって観客を魅了する。パリ万博のルーマニアのステージでは、非常に可愛い若いルーマニア人の女の子が手刺繍の伝統的な民族衣装を着用していた。その素晴らしい民族衣装はルーマニアの独特の美しさをさらに高め、小さな特別な楽しみを観客に与えたのである。

1889 年のパリ万博で、ルーマニアのラウタリの音楽家達が演奏し、2 名のナイ奏者が金銀メダルを獲得した。金銀メダルを獲得した奏者は、アンゲルシュ・ディニク Angelus Dinicu とクラチュネスク Craciounescu である。［George: 1890］この二人の奏者のメダル獲得は、世界各国やルーマニアの人々に自国の民族楽器であると印象づける機会となったのである。そしてナイがソロの楽器としての地位を築くきっかけとなったと考えられる。

パリ万博におけるパンフルート奏者達の活躍は、現地では衝撃的に報じられていた。

3-3．コンクールでの競争

パリ万博では、伝統文化や芸術の様々コンクールにおける競争が同時に開催されていた。伝統的な民族音楽におけるコンクールも開催されており、それまでも万博にルーマニアも展示や演奏を行っていたが、成功はしていなかった。1889 年のパリ万博で初めてルーマニアの伝統文化や民族音楽に対する関心が高まったと言える。

ハンガリーのロマ、チガーニが 1 位を獲得。そしてルーマニア人のラウタリは初めての出場で金銀賞 2 位を獲得した。この喜ばしい出来事はルーマニアでも大々的に報じられたのである。ここで活躍した奏者こそが、クラチュネスクとアンゲルシュ・ディニクである。これは歴史的にも大きな出来事であり、自国の民族音楽の価値を考え直すきっかけとなったと考えられる。

フランスの音楽紙 Le Ménestrel:journal de musique で大きく紹介されている。初めてルーマニアの村人の音楽が演奏された瞬間であった。クラシックしか演奏されていなかった時代に初めて民謡が取り上げられたのである。19 世紀までは、王侯貴族たちは村人の音楽や伝統文化に興味がなかった。初めて注目されということである。時代の象徴ではないだろうか。音楽の専門的な教育を受けていない村人の音楽を評価し賞を与えることについて、50 年前の古いクラシック音楽家達、農民音楽を知らない人々は、何と言っただろうか。完全に素朴な音楽である。木曜日にパリの中心地である Trocadero トロカデロで開催された絵のように美しい音楽コンクールの民族音楽部門は、この点に関して疑いの余地を残さなかった。このようにして、私たちはパリ最大のホールで演奏を聴くことができ、ブルボネのバグパイプ、南フランス、イタリア、スペインのギター、マンドリン、ハンガリーのチンバロム、ナイまたはルーマニアのパンパイプ、最後にルーマニアのラウタリ、セルビア人のオーケストラ、熱狂的で奇妙なリズミカルな音楽を、民族衣装を着た音楽家たちが演奏する。特定の地域を特徴づける楽器の非常に異なる響きの連続が、コンクールのタイトルで使用されている「絵のように美しい」という言葉が大いに説明してくれてい

写真２：アンゲルシュ・ディニク
写真提供：ルーマニア国立図書館

写真３：パドゥラニュ・クラチュネスク

る。トロカデロの舞台上には､絵のように美しいものは何もなく､奏でる音楽からプロヴァンスの空、ハンガリーやルーマニアの田園地帯、さらにはナポリ湾の太陽を感じることができる。見るのがとても楽しく絵のように美しいと感じることさえあり、そして音楽が民族衣装に合っていて、色彩豊かであった。

クラスC（管楽器部門）：ルーマニアのナイ（パンフルート）。第1位はギョルゲ・ディニク氏、第2位クラチュネスク氏、伴奏楽器として2つのヴァイオリンとコブザはゆったりとして即興的な要素が含まれた美しい短調で演奏した。そして､ナイは､時々速いスピードで楽器を動かし、哀愁漂う音楽からすぐに舞曲のホラなどの音楽を演奏するなど、躍動感に溢れており、低音から高音域まで管を使用して演奏した。観客は誰しも少しでも自分達も一緒に音楽に参加したいと思っていた。陽気でダンスを踊りたくなるような熱気に包まれており、古代ギリシャ時代の妖精たちが舞い降りてきたようであった。その後、熱狂的な動きで楽器の低音域から高音域までグリッサンド奏法を使用した演奏を披露、その効果は非常に効果的［J TIERSOT.: 1889］と述べられている。

グループ演奏による賞第1位はハンガリーのチガーニ、2位はルーマニアのラウタリ、第3位は、ハンガリーの女性オーケストラである。ルーマニアのラウタリの演奏は、緊張感がなく、緩やかだが独創性がある。パンフルートの音色はオーケストラの中で、強調させる役割を担っていた［J TIERSOT.: 1889］のである。時代の変わり目、民族音楽が価値ある音楽として、クラシック音楽と同等の評価を受けた瞬間であると言える。管楽器部門でルーマニア人がハンガリー人を抑えて、第1位、2位を独占し、さらにその後、グループでのコンクールも開催され、ルーマニアのラウタリ第2位の銀賞を受賞している。これはルーマニアにとって快挙であった。

3-4．エリザベタ女王（カルメン・シルバ）からの支援

フランスの記事 Le Parisien では、1889年5月12日にパリの外国人と題した記事が掲載され「束ねて留めた葦で遊ぶ奇妙な芸術家であるルーマニアのラウタリは、チガーニを倒すことを予想できる」チガーニには、今まで次から次へと多くの演奏会の依頼が舞い込んだ。私達の変化する国では、ハンガリー人が新しい名人（ルーマニアのラウタリ）に道を譲っているのは当然だと述べられている。このラウタリの人気を後押しした人物にルーマニアのエリザベタ女王がいる。

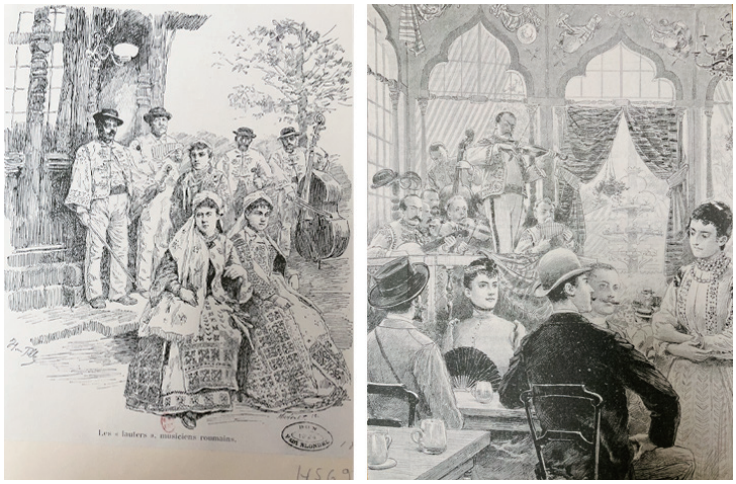
ルーマニアのエリザベタ女王は、ジャーナリスト エドゥアール・ハーヴェ Edouard Herve の夫人の夕方のパーティーに招待された。パーティーでは、チガーニとラウタリの音楽のどちらが良いか投票を行った。そこで、全一致でラウタリが勝利した。ラウタリの音楽家達は、エリザベタ女王によって暖かく推薦されたのである。

ルーマニアの民族衣装についてもエリザベタの影響が強くある。いくつかの民族衣装のデザインを行い、ラウタリ達もそれまでとは異なる新しい美しい刺繍が施された衣装を着用して演奏したのだ。黒と白の刺繍が施された民族衣装を初めて着用して公の場で演奏した場所がパリ万博である。1889 年の万博のために製作された衣装とラウタリの音楽が万博を、成功に導いたと言える。それまでは、ギリシャ風の全く異なる長いベストに幅が広いベルトを着用していた。（**絵画 1** 参照）今までは、ラウタリはズボンを着用していなかったが、初めてドイツ風のズボンを着たのである。現在のルーマニアにおける伝統的な民族衣装であるという認識は、このパリ万博での人気が強く影響している。エリザベタ女王はパリ万博での成功の立役者であることは疑いの余地もない。

写真４：エリザベタ女王
写真提供：ルーマニア国立図書館

3-5．ハンガリーのチガーニがルーマニアのラウタリに道を譲った

Le Ménestrel : journal de musique 1889 年 9 月 1 日に発行された音楽紙によれば、ルーマニアのラウタリの音楽は、ハンガリーのロマ音楽といくつかの類似点があることを示さずには表現できない。どちらもあきらかに共通の要素から音楽を作り上げている。最も際立った違いは、外見的な方法ではなく、音楽の表現にある。観察することで明らかな違いを外部からも発見することができる。ルーマニアのラウタリは、ハンガリーのチガーニと比べて人数が遥かに少なく、室内楽の演奏を目的とした小オーケストラであることが分かる。チンバロムやクラリネットは、ナイに置き換えられている。それによってより女性的な音色となっている。そのため、英雄的な感情の解釈にはあまり適していない音楽である。音楽のほとんどの大部分は哀愁漂う音色が支配している。即興的な演奏であり、子守唄の魅力、調整は短調で形成されている。短調の様々な種類に属しており、オリエンタル的な影響が見られる。フランスのポピュラーソングや特に古代の写本から伝えられたものに見られるように感じるが、それでも予想外だ［J TIERSOT.: 1889］と述べられており、当時のフランス人にとっていかに斬新な演奏だったかが伺える。ハンガリーのチガーニーによる演奏は、荒々しく野性的な哀愁漂う音楽であるが、ラウタリの演奏は異なる。時に爆発的な音楽を奏でるが、魅力的であり、絶え間ないスタッカート、継続的なグリッサンド、トレモロなどを用いている。時々悲しみを歌い、とても穏やかに、最初の幻想が消えてしまった悲しげにうつむく少女のように、彼女の顔の美しさや純粋な表情を涙が変えることはない。彼らは即興的に自然な演奏を行っている［J TIERSOT.: 1889］とある。当時のルーマニアのラウタリ達の演奏は、チガーニにより優れていると評価があったのだ。



絵画２：1989 年パリ万博の様子
提供：国立フランス図書館

フランスの記事レ・フィガロ Le Figaro によれば、1889 年までは、ハンガリーのチガーニ（ラウタリ）が人気だったが、パリの万博をきっかけにルーマニアのラウタリの人気が高まった。1889 年 5 月 10 日､昨日そこにはラウタリの音楽家達が 16 人いて､ヴァイオリン、他の弦楽器、ナイを演奏している。2 つか 3 つの例外を除いて、音符を知っている者は一人もいなかったが、彼らは 1 時間以上にわたり、私達を魅了したとある。並外れた音楽家たちは自国で人気の様々な曲を演奏し､その後､いくつかのウィーンのワルツとパンフルートのためにアレンジされたリゴレットによるロマンスをソロで演奏した。彼らは驚くべき表現とニュアンスで演奏しており、彼らのリズムはハンガリーのチガーニよりリズムが固定されており、彼らの演奏は妙技に欠けていない。ナイでアリアを演奏したソリストは、真の芸術家であると絶賛している。

パリ万博の最中、ルーマニアの音楽は、ハンガリーの音楽と比べられる機会が多くあったことが明らかになった。ラウタリの音楽は、チガーニの楽団と比べて少人数であり、室内楽向けの小オーケストラとして認識されていたことも分かったのである。ルーマニアのラウタリとハンガリーのチガーニの音楽には類似点はあるが、女性的な柔らかな音色、哀愁を帯びた音色であり、大きく演奏表現が異なる点は大変興味深い。様々なフランス記事に比較記事が掲載されている。当時のフランス人は、パリ万博での演奏に魅了され、ハンガリーの音楽よりもルーマニアの音楽は哀愁漂う音色に心を奪われたのである。

３-６. 万博後のフランス　パンフルート奏者達の活躍

1889 年のパリ万博をきっかけにパンフルートの演奏は広がり、ナイ奏者達は活躍した。フランソア・バゼン Fancois Bazin が作曲した新しいオペラ LE VOYAGE EN CHINE が上映された。オペラの幕間でラウタリが演奏していた。ディニク・チョラクのラウタリの中で、アンゲルシュ・ディニクがナイのソロ演奏で登場している。演奏曲は、ワルツやポルカなど、フランス人が好む曲を演奏している。［L`Union liberale: 1891］当時、フランスではオペラの幕間で演奏されるほど、人気を博していたことが分かる。

フランスのサーカスでもラウタリが演奏している。ナイ奏者は、1889 年のパリ万博で演奏し、金銀メダルを獲得したパドゥラニュ・クラチュネスクである。演奏に使用したナイは、15 管でカーブしている［Le Petit Troyen: 1890］と述べられている。当時、すでに 2 オクターブの演奏を可能とする楽器を使用していたことも分かる。

３-７．世界の作曲家たちに愛されたパンフルート

万博後、ナイ奏者達はフランスを始め様々な国で活躍をしている。ロシアでも人気があり、ルーマニアのラウタリとナイが演奏されていたのである。ロシアのロマ達による演奏の時代は終わりつつあると想定しなければならない。当時､美しい音楽を奏でていたのは、ルーマニアのラウタリとハンガリーのチガーニにだけである。ロシアの地元新聞紙 1894 年 7 月 15 日の Novoe Vremia は、私達に詳細を説明してくれている。有名な作曲家フランツ・リストは、ルーマニアのラウタリについて興味深い本を書いた。彼は、ラウタリの歌と音楽の大ファンだったのである。偉大な詩人アレクサンドル・プーシキンもラウタリの歌が好きだった。ロシアのフィドラー（ロマのオーケストラ）の時代は終わりつつあると想定しなければならないと述べている。当時のロシアでは、優れたヴァイオリンの演奏を聴くことは滅多になかったのである。美しい音楽を育んだのはルーマニアのラウタリとハンガリーのチガーニだけだと断言している。ラウタリとチガーニは生まれながらの音楽家であり、情熱と熱意を持って自分の職業を愛していると言われている。サヴァ・パドゥレアーヌの指揮の下、ルーマニアのラウタリのオーケストラがクレストフスキー庭園で演奏し、毎日大成功を収めている。オーケストラは 10 人編成で規模は大きくないが、10 人が入れ替わり演奏している。屋外でポルカ、ワルツ、ロマンス、メドレーを演奏したのである。ラウタリのオーケストラは、シンバルといくつかの結合されたパイプで構成された、古くはパンのフルート（ナイ）として知られる古い管楽器の巧みな演奏のおかげで、独創的な効果を実現している。伝統的な音楽の表現を守ってきているのは、ルーマニアのラウタリとハンガリーのチガーニだけであるという評価も不可解だとも述べられており、ロシアでもルーマニアのナイが注目を浴び、ラウタリの中でも存在感を表していることが分かる。

最も注目すべき点は、偉大なロシアの古典による 1889 年から 1890 年にかけてリムスキー＝コルサコフによって作曲されたロシア語のオペラ「ムラダ」でナイが使用されたことである。1880 年頃より世界で知られ、評価されたラウタリとナイの音楽が、オペラの作品の中に登場し、彼が、交響楽団でこの珍しい楽器を使用するようになったことは極めて大きな出来事である。このようにナイは偉大な作曲家の作曲によって、楽器としての地位を更に高めて注目された背景がある。

４．フランス以外の国でのパンフルート奏者達の活躍

４-１．トランシルヴァニア地方での演奏

当時、ルーマニアのトランシルヴァニア地方は、オーストリアーハンガリー帝国であった。ルーマニアの新聞紙 Tribuna Sibiului の記事によれば、Dobrică ドブリカのラウタリ

オーケストラは、Ploiesti プロイェシティからやってきた。パリに向かう途中でシビウに立ち寄り、ヘルマンスガルテン、グランド・ビアハレでコンサートを行った。ドブリカの胸には、ルーマニア王とイタリア王からの勲章である 3 つのメダルが飾られている。演奏時には、プロイェシティの農民の民族衣装を着ている。民謡も歌い、音楽家の中にはナイを演奏する人がいる。あらゆる種類の芸術的な音を表現することが可能になるからだと述べられている。当時のパリはパリ万博の開催中であり、ラウタリ達の活躍を耳にした音楽家達が、パリを目指したことは容易に想像できる。

4-2．チェコ・プラハでの万博

1891 年 5 月 21 日に発行された新聞 Tribuna によれば、いくつかの醸造所やレストランには、各国の展示ブースがあり、チェコでは知られていない珍しい楽器を演奏するだけでなく、同時に民謡を歌っている。その中で最も大衆を喜ばせ満足させたのは、ルーマニアの展示ブースである。ラウタリのオーケストラは 9 名で構成されており、ナイ奏者のニコラエ・バシレスク氏の名前が挙げられている。ナイは、チェコではまったく知られていない楽器であるが、彼はそれを完璧に演奏したとある。

4-3．ベルギーからの手紙

1892 年 4 月 28 日に発行された新聞 Tribuna にルーマニアのラウタリ達は、ベルギーでも活躍していたとある。ルーマニアのヴァイオリンニスト、アレク・ヴラデスクの指揮の下、ルーマニアの民族音楽で世界を魅了した。民族衣装の美しさは称賛されているが、特に外国人が面白い楽器としてナイを絶賛している。ベルギーでもナイが認められ、イギリスのロンドンに招聘され、その後、シカゴでも演奏している。ルーマニアのナイ奏者達は、フランスに留まらず、ヨーロッパやアメリカでも活躍していたことが明らかになったのである。

4-4．コペンハーゲンからの報告

1899 年 7 月 24 日発行のシビウの Telegraful Roman, 新聞紙によれば、1899 年 7 月 16 日にデンマークのコペンハーゲンにあるナショナルホテルのカフェでは、Botoşani ボトシャニ出身のルーマニア人のラウタリが演奏している。多くの人々が耳を傾け、彼らの演奏を称賛している。オーケストラは、デンマークのヴァイオリンニスト 3 名と一緒にルーマニアラウタリ、そしてナイ奏者がルーマニア民謡を演奏している。ナイの演奏は、聴く人々に大きな感動を与えると述べられている。1899 年 8 月 1 日発行オラディアの Familia 新聞紙には、ボトシャニ出身のルーアニアのヴァイオリンニストの一段が、コペンハーゲンのカフェで大成功を収めた。ナイは、ルーマニアのコンサートを喜び拍手する大衆に大きな感銘を与えたのであると述べられている。今までラウタリの主役は、ヴァイオリンニストであったが、新しく珍しい楽器であるナイに注目が集まり、記事でも主役がナイ奏者になっていることからも、ヴァイオリン奏者を支える楽器ではなく、ナイ奏者がソリストとしての地位を確立していったことも伺える。

５．パンフルート奏者 クラチュネスク

1890 年に発行されたフランスの Le Petit Troyen : journal démocratique régional の記事では、何日間にも渡って、クラチュネスクが取り上げられている。前回のパリ万博の開催地であるトロアデロで、絵のような音楽と称され 1 位を獲得した有名なルーマニアのオーケストラが、まもなく訪れる。市民の多くがシャン・デ・マルスでちらりとみた驚くべき 10 名のラウタリ達は、パリで成功を収め、今日まで演奏を続けている。観客たちは、並外れた楽器の音楽家達の演奏を聴くことができる。その中には、並外れたフルートであるパンパイプ（ナイ）を演奏するクラチュネスクがいる。彼のレパートリーの中で、最高の作品の一つである古代の夢を聞いたことがある。驚くべきことに、ここに初めて彼の風貌について書かれているのである。クラチュネスクは、哀愁漂う口ひげを生やしており、演奏する際に、管に沿って、ゆっくりと動いており、髪型はヒヤシンスのようだと述べている。古代ギリシャ時代にタイムスリップしたようだと表現されている。クラチュネスクの演奏中には、髭が長いため、管の穴から穴へ髭も一緒に移動している。また、彼は緑色の翡翠の指輪をはめており、ヤツメウナギのように輝いていた。翡翠の指輪をはめていたという点から当時のクラチュネスクは、ある程度稼いでいた可能性があり、裕福であったと推測できる。

1890 年 10 月 31 日の記事では、クラチュネスクの演奏会が絶賛されている。昨日の演奏は大成功、予定通りだった。大勢の聴衆がルーマニアのラウタリ達に拍手をするため集まった。夜に演奏された 12 の作品は大成功を収めた。特にクラチュネスクは、彼の奇妙で刺激的な才能、熱意で聴衆を驚かせた。ナイの音色を聴くと、長いルーマニアの夜について忘れられなくなる。音楽は時にすぐ終わり、観客をもっと聞かせて欲しいという感覚に陥らせ、独創的だ。牧神パンの天の笛、クラチュネスクの並外れた驚異の演奏と述べられている。

1890 年 11 月 1 日フランスの記事にもクラチュネスクを初め、ルーマニアのラウタリへの称賛が掲載されている。ルーマニアのラウタリ達は、2 回目の演奏を行った。観客は彼らにスタンディングオーベーションを贈ったのだ。クラチュネスクは、彼のフルート（ナイ）から見事な音を引き出した。この音楽家は素晴らしく、奇妙で刺激的な才能を持っていると絶賛している。21 時に入場すると、ヴァイオリンの音が響き渡っている。彼らは有名なルーマニアのラウタリである。柔らかなアクセントのあるフルート（ナイ）の音色で室内を満たしている。シャープのしなやかな音色、半円状の 25 本の管を使用し、人々の人生の痛みを吹き飛ばす南国の風を感じる音楽である。何という素晴らしい才能を持って、何という感情を込めて演奏しているのだろうか。彼らの音楽を聴いたことがない人にこの独創的な音楽を作ることは不可能である。休日の家族向けの演奏会で多くの顧客を満足させているため、主催者は 2 つの公演のためにラウタリと契約した。今後、いくつかデビューが決定したとのべられている。クラチュネスクが、すでにシャープやフラットの半音操作を使用していた可能性が浮上したことは極めて重要な発見である。また、当時すでに最新の楽器の形状と同じように 25 本（テナー管）の湾曲した楽器を使用していた点は大きな発見である。19 世紀末には、すでに 3 オクターブ以上の音色を奏でることができる湾曲した 25 本の楽器が演奏されていたことは、今回の研究で初めて明らかになったのである。パリ万博で大活躍をしたクラチュネスク Craciounescu だが、ルーマニアではほ

とんど取り上げられたことはなく、今まで知られていなかった。クラチュネスクの人物像や生活は明らかにされてこなかった歴史がある。パリ万博後もしばらくの間はフランスに滞在し、演奏活動を行っていたことも明らかになったのである。

６．パンフルート奏者 アンゲルシュ・ディニク

６-１．音楽家としての歩み

写真５：ナイ奏者 アンゲルシュ・ディニク Angelus Dinicu 提供：ルーマニア国立図書館

Naistul-virtuoz, Angheluş Dinicu, autorul faimoasei piese *Ciocârlia*.

パリ万博で大活躍を果たしたアンゲルシュ・ディニクは、1828 年にブカレストで生まれ、1905 年 11 月 7 日にブカレストで亡くなるまで活躍した音楽家［V.Cosma 1996］である。ルーマニアのスカウネ地区で幼い頃にパンフルートを学び、偉大な奏者であるラドゥ・チョラク Radu Ciolac、イオン・クラチュネスク Ion Crăciunescu、タラフのリーダーであるドミトラケ Dumitrache、そしてオキャアルビ Ochialbi のリーダーから演奏技術を盗んだのである。ヴァイオリン奏者のコスタッシュ・ディニク（1806-1884）の兄弟が運営するバーで音楽を学び、サヴァ・パドゥリャアヌ Sava Pădureanu のオーケストラの一員として、ヨルダーチェ・レストランから、次にラスカ・ガーデン、サリンダル・レストランとテラスで演奏［V.Cosma 2009］するなど経験を積み、音楽家としての才能を発揮し、活躍していったのである。

６-２．作曲家としての顔

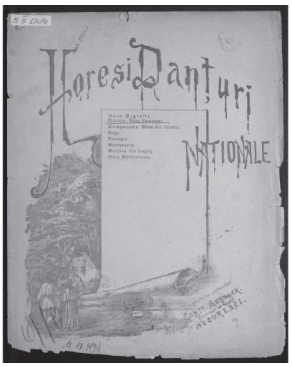
アンゲルシュ・ディニクは、ブカレストのレストラン「Raşca」、「Sărindar」などのオーケストラのナイ奏者である。彼は、ルーマニア王宮の客人としてポヤナ ストゥネイ（1896 年）で、オーストリア皇帝の前でラウタリとして演奏した。演奏だけに留まらず、ルーマニアの伝承音楽を作曲・編曲し、ドイナ誌にサルバ・ズネロール（1884）、ホラ・フロリカ（1885）、ホラ・アムゲリカ（1885）、サルバ・オロアガ（1885）、チョクリアなどの作品を発表［V.Cosma 2009］している。雑誌ドイナの記事、1885 年 10 月 1 日第 47 版アンゲルシュの楽譜「ホラ・フロリカ」が出版された場所ブカレストでは、ディニクという名前で実際に活躍しているヴァイオリンニストにも注目が集まっていた。アンゲルシュ・ディニクは、最も有名な国民的音楽作曲家だったのである。

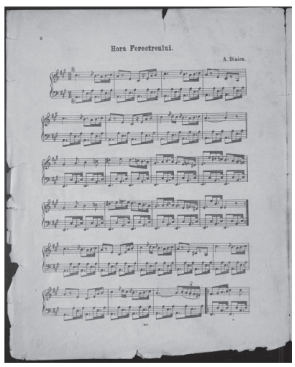
1889 年のパリ万国博覧会でチョクリアを演奏し、大成功を収めたアンゲルシュ ディニクは、数年前に始めた作曲の仕事について真剣に考えるようになった。彼は 1885 年にドイナ、ホラ・フロリカとベルト・ダンス（スルバ）の曲を音楽雑誌に掲載し、年老いた音楽家が「西洋音楽を勉強する」（つまり音符を学ぶ）ことを強いられたことに言及した。彼の息子ゲオルゲ・ディニクは、アンゲルシュ・ディニクの死後も作品を出版し続けたので

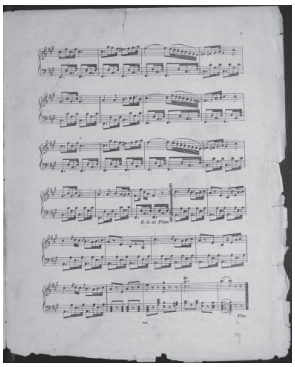
ある。今日のラウタリのレパートリーの基礎となっている有名な音楽の豊富な曲を手に入れられる［V.Cosma 1960］のは、2 人のディニクの努力の結晶であることをけして忘れてはならない。アンゲルシュ・ディニクは、今までは楽譜を見ることなく即興的に演奏をしており、西洋音楽とは異なる独自のスタイルを貫いてきた。しかし万博がきっかけとなり、音楽理論を学び、作曲や編曲を通じて、自身の音楽を他者へと伝えていく必要があると強く感じ勉強したのである。高齢になったアンゲルシュ・ディニクが西洋音楽を学び、さらに音楽家として成長していこうとする姿勢が見られた。また、彼の作曲する音楽が魅力的で音楽家たちに求められていた可能性がある。彼は、民族音楽の時代が変わることを予見していた。彼のすべての作品は、ルーマニアの国民的な音楽をリードしてきたのである。

ピアニストのグリゴーレ・ディニク Grigore Dinicu は、1952 年 -1953 年にアンゲルシュ・ディニクに依頼して書かれた貴重な作品の原稿に収められた彼との思い出の中で、アンゲルシュ・ディニクの家族に人気のある信じられない光景を語っている。誰もがアンゲルシュ・ディニクが演奏するレストランに集まり、演奏を聴いていた。あまりに素晴らしい演奏だったため、観客たちは、グラスを口元までは持っていったが、凍りついてしまい誰も飲みものを飲めなかった。レストランで演奏をすると毎晩必ず 2 匹のネズミがやってきて観客と一緒に演奏を聴いていた。しかし、グリゴーレ・ディニクの依頼で作曲した作品の初演では、1 匹のネズミしか聴いていなかったのである。この出来事により、アンゲルシュ・ディニクは、約 2 年間この作品を演奏することを拒否し続けたのである。裕福な顧客がやってきてこの作品の演奏依頼を受け、ついに演奏した際には、一度は聴きにこなかったネズミが、魔法のように 2 匹現れ、観客も大いに盛り上がった［V.Cosma 2009］のである。この原稿で書かれている内容から、アンゲルシュ・ディニクの人柄や音楽家としてのプライドを感じることができ、繊細な性格であったと考えられる。

アンゲルシュ・ディニクが 19 世紀に作曲したピアノ作品が残されている。







※アンゲルシュ・ディニク作曲 19世紀に作曲されたピアノのための作品　提供：ルーマニア国立図書館

6-3．王族達に愛されたナイ奏者アンゲルシュ・ディニク

1896 年の秋 (9 月 16 日)、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇帝フランツ ヨーゼフがブカレストを公式訪問したとき、アンゲルシュ・ディニクとクリスタチェ・チョラク

Cristache Ciolac のオーケストラは、ブカレストの宮殿とポイアナ・スタネイで開催されたガラ レセプションで演奏するよう招待された。女王カルメン シルバ (エリサベタ) がアンゲルシュ・ディニクの演奏に驚く外国のゲストに、珍しいルーマニアのナイの起源について説明している。ルーマニアへの訪問の終わりに、ルーマニアのエリザベタ女王は、著名なオーストリアのゲストに尋ねたと回顧録作家のビクター・ビルチュレスク Victor は報告している。フランツヨーゼフは、ブカレストのカラヴィクトリエの景色とラウタリの音楽が好きだと答えている。皇帝フランツ・ヨーゼフの前で、ラウタリが演奏したコンサートでは、アンゲルシュ・ディニクがオーストリアの首都で良く演奏されているクラシックを演奏［V.Cosma 2009］している。様々な国や地域でも演奏で人々を魅了し、王族達も好んで聴いていた。オーストリアの皇帝もナイ演奏の演奏が好きだったことも大きな発見である。

６-４．アンゲルシュ・ディニクのルーツ

アンゲルシュ・ディニクの家族は、1812 年から 1818 年のルーマニア国王カラジャ・ボーダの統治時代よりも前に音楽家として活動を始めた。アンゲルシュ・ディニクの父親は 18 世紀の終わりに生まれた可能性が高く、ギタリストとして活躍していた［V.Cosma 2009］のである。ギターは、当時の宮廷音楽として演奏されており、主に女性が演奏していたのだ。ここでは、ギタリストとしてのディニクの名前を確認することは出来ていない。彼の名前が登場するのは、19 世紀の初頭、貴族達の結婚式、大家族のパーティーなどである。

当時のルーマニアでは、大規模な火災や、1813 年 7 月にはペストが大流行し、ブカレストだけでも 25,000 人～ 30,000 人が亡くなった。1814 年に流行が収まると、結婚式が続いたため、ラウタリ達も熱狂的に仕事を続けたのである。祝祭日になるとスラム街の住人の間では、3 日間、貴族の間では、7 日間もお祝いが続いたのである。

ギタリストのディニクと弟のコスタッケ・ディニク Costache Dinicu は、ギョルゲ・ギガ・ヴォーダ Grigore Ghica Vodă 国王の宮廷で最も評価の高いラウタリであり、ブカレストのラウタリにとって音楽の位置付けの移行期の旋風の中にいた［V.Cosma 2009］のである。

ディニク家の中でも特にコスタッシュは創造的な才能があり、コーラス「Plansul tîgăncii」「Garofita」などの作曲者であった。ディニク家の人々によって書かれた曲は 19 世紀のおわりにアンゲルシュ・ディニクの息子によっていくつかの楽譜にされ出版したのである。一部はヴァイオリンとピアノのために編曲され、レジーナ・マリア Regina Maria 弦楽四重奏団のメンバーであり、首都ブカレストの有名ないくつかのヴァイオリングループの指揮者でもあった。ホラ「hora“Șapte scări」（ルーマニアのすべてのヴァイオリニストにとって欠かせないレパートリー）は、コスタッケ・ディニクによって作曲され、ジョルジュ・エネスク George Enescu は、「Romanian Rhapsody no.1」で人気のあるテーマを作曲で使用している。

出版社コンスタンティン・ゲバウアー Constantin Gebauer が、1898 年から 1899 年に出版したコレクションの一つ、タイトル「Dinicu-Album」がある。オラデアの雑誌ファミリアが 1896 年 5 月 19 日にコンスタッケ・ディニクの新しい作品に関する情報を掲載している［V.Cosma 2009］ため、当時も人々の関心は高く興味深いものであったと推測できる。ギョルゲ・ア・ディニクによって編集されており、コンスタッケ・ディニクがいつ亡くなったかはまだ分かっていない［V.Cosma 2009］のである。

ディニク家の第3世代は、古いラウタリの痕跡は全くなく、(チェリストのディミトリー ディニク Dimitrie Dinicu、ヴァイオリンニストのギョルゲ・ア・ディニク Gheorghe A. Dinicu、作曲家のニコラエ・ディニク Nicolae Dinicu）完全に全員が高度な専門的なクラシックの音楽家であり、高等教育を受けて卒業している。ディミトリエ・ディニク(1868-1936)とニコラエ・ディニク(1879-1954)がヴァイオリンと音楽との繋がりを失い、クラシック音楽にのみ焦点を当てていた。代わりに、ギョルゲ・ア・ディニクが父親アンゲルシュ・ディニクの伝統を継承したのである。ディニクは、ラウタリの創作を促進させ、彼らの音楽を収集、転写し出版した。特に偉大なオキャアルビ、サヴァ・パドゥレアーヌ、チョラクとの直接接触していたラウタリの民族音楽全体を、様々な地元のオーケストラと演奏した［V.Cosma 2009］のである。アンゲルシュ・ディニクの後継者として、彼らの素晴らしい民族音楽の伝統を守り、後世に伝えた人物がギョルゲ・ア・ディニクであると言える。

６−５．アンゲルシュ・ディニクからの贈り物

アンゲルシュ・ディニクは、民族音楽の作曲家として、ナイ奏者として多大なる功績を残した人物である。今日のルーマニアの伝統的な民族音楽を語る上で、欠かせない存在である。作曲家達にも多くの影響を残している。しかしながら、ルーマニアの人々にとって記憶に残っているのは、作曲家のアンゲルシュ・ディニクではなく、卓越したナイ奏者の姿であった。アンゲルシュがベストの右ポケットから豆や乾燥エンドウ豆を取り出してパンフルートのパイプの中に入れて、チョクリアを演奏したときには、彼のレストランに集まったすべての人々が彼のラウタリの演奏に魅了された［V.Cosma 1960］のである。いかにナイ奏者として人気を博し、人々に民族楽器ナイの魅力を伝えていたかが伺える。なぜ、豆を管に入れたかは明らかになっていない。今後、明らかにする必要がある。

ルーマニアを中心に世界で活躍したアンゲルシュ・ディニクは、1905年11月7日にブカレストで亡くなった［V.Cosma 1969］。その訃報は、1905年11月8日に発行された新聞紙Gazeta Transilvaniieでも大きく取り上げられた。有名なラウタリ アンゲルシュ・ディニクが埋葬された。彼はディニク家の創設者であり、その音楽家達は、今日ルーマニアで音楽芸術の地位を高めている。これは、彼らを最高の音楽家に育てた古いアンゲルシュから受け継いだ才能があったからである。アンゲルシュ・ディニクには、3人の息子がいる。ブカレスト音楽院（現：ブカレスト国立音楽大学）の教授であり、王宮のコンサート奏者であるD.ディニク氏、ブカレスト音楽院を卒業し、ウィーンにいる若い作曲家ニコラエ・ディニクがいる。音楽の勉強を完了するために、故人の4人の娘のうち3人は音楽教師と結婚している。アンゲルシュ・ディニクの訃報を聴いた女王陛下は、ディニク兄弟に哀悼の意を表す電報を送った。

アンゲルシュ・ディニクは、ナイの完璧な芸術家であるという私たちの抑えきれない後悔を呼び起こす。彼の子孫の中で、特にこの際立って芸術的、伝統的なタラフの装飾の伝統を継承する人は、これ以上出てこなかった［G.Costescu 1944］と述べられている。

アンゲルシュ・ディニクの傑作は、チョクリアである。アンゲルシュは、このような難しいグリッサンドやトリル、特にナイチンゲールのさえずりの模倣し、様々な鳥の声を表現したのである。この作品が、パンフルートの名人が演奏する曲という認識を生んだ。今

日の全てのルーマニア人パンフルート奏者の名刺になったことを忘れてはならない。この国で輝かしい経歴とパリ万博博覧会での芸術的な演奏ツアーは、彼に続く時代の牧神パン、ゲオルゲ・ザンフィルに至るまで、何世代にも渡るナイの名手の手本となった［V.Cosma 2009］のである。

若い頃よりラウタリのオーケストラの中で、ナイ奏者として活躍をしたアンゲルシュ・ディニクは、1889 年のパリ万博博覧会で金賞を獲得し、卓越した演奏技術と溢れる才能を活かし、ソロで演奏する楽器としての地位を確立させた。ルーマニアの伝統的な音楽を作り上げた一人であることは明らかである。ナイ奏者としての演奏、作曲家としての活動を通じて、西洋音楽を学ぶ必要性を感じ、高齢になってからさらなる学びを深めた姿勢からは、民族音楽に対する先見性や音楽を愛し、真摯に向き合う姿勢が見られた。アンゲルシュ・ディニクの活躍から約 45 年後、ナイ奏者ファニカ・ルカがブカレスト国立音楽院に招聘され、パンフルートの教育活動が本格的に開始するのだ。世界的なパンフルート奏者であるゲオルゲ・ザンフィルが葡萄農園からブカレストにやってきてナイを学び始めるのである。

7．おわりに

ルーマニアの民族楽器である「ナイ」は、18 世紀前半にはすでに高い演奏技術を確立していた。王侯貴族達の娯楽として愛された楽器が、1889 年のパリ万博博覧会でアンゲルシュ・ディニクとクラチュネスク 2 人のナイ奏者の活躍により金銀賞を獲得し、フランスのパリを中心に世界中で知られるようになったのである。19 世紀には、すでにフランスを始め、オーストリア、ベルギー、デンマーク、アメリカでも演奏され人気を博していたことが、今回の研究で初めて明らかになった。民族音楽に留まらず、クラシック、有名な作曲家の作品の中でナイが取り上げられるようになった点は、大変興味深い。偉大なロシアの古典 1889 年から 1890 年にかけてリムスキー＝コルサコフによって作曲されたロシア語のオペラ《ムラダ》でナイが使用されたのである。1880 年頃より世界で知られ、楽器として評価されたナイが、オペラの作品の中に登場し、交響楽団でこの珍しい楽器を使用するようになったことは極めて大きな出来事である。このようにナイは偉大な作曲家の作曲によって、楽器としての地位を更に高めて注目たことも明らかになったのである。ルーマニアを始め、ヨーロッパの王侯貴族達にも愛されたナイは、ラウタリの楽器としてではなく、ソリストの楽器として地位を確立していったのだ。

ナイ奏者クラチュネスクとアンゲルシュ・ディニクにも、大きな違いがある。ともに万博の立役者であったが、クラチュネスクは、今までルーマニアではあまり注目されておらず、研究も進んでいなかった。その名を知るものはいない現状だ。その活躍を伝える資料も少ない。今回の研究によってナイ奏者として活躍したクラチュネスクの風貌や音楽家としての足取りが掴めたことは大きな成果である。また、25 管の湾曲した楽器をすでに使用していたことは初めて明らかになった。今の楽器とどのように違うのか、どこまで明らかにすることができるかが今後の課題だ。

一方でアンゲルシュ・ディニクは、万博前より作曲活動でも国内で人気を博し、ルー

マニアの伝統的な音楽の作曲家としての地位を確立していたのである。また、王侯貴族たちとの交流も深く、ルーマニアの人々に深く愛された音楽家であったことが明らかとなった。また、ヨーロッパでの演奏、作曲活動を通じて西洋音楽理論を学ぶ必要性を感じ、高齢になってから学びを深め、後世にルーマニアの民族音楽を伝えた功績は大きい。しかしながら、ルーマニアの人々にとって最も印象深いのはナイ奏者としての卓越した演奏であった点は大変興味深い。今日も活躍している世界的なパンフルート奏者であるゲオルゲ・ザンフィルへと繋がっている。フランスのパリ万博での大活躍をきっかけに、クラチュネスクとアンゲルシュ・ディニク 2 人が、ルーマニアの民族楽器の地位を高め、多くのナイ奏者に影響を与えたことは間違いのない事実と明らかになった。この頃から、ルーマニアで活躍するナイ奏者達は、パリを目指し、パリから世界への切符を手にする流れが生まれたと言えよう。彼らの活躍と素晴らしい才能があってこそ、ルーマニアのナイが世界で演奏される楽器へと成長できたのである。この 2 人の活躍から約 45 年後に、ファニカ・ルカが教育活動を開始するのだ。現在では、ルーマニアやモルドバを初め、世界中でも演奏されている。現在、南米ではルーマニアの民族楽器ナイと同様の楽器が製作され、盛んに演奏されている。素早い動きを可能にし、より多くの曲や難易度の高い曲も演奏することを可能にする点が評価され、模倣されている。今後、どのような過程を得て、楽器が現在の形に進化していったかについても、研究で明らかにしていく必要がある。最も古く、最も先進的な楽器であるルーマニアの民族楽器ナイの今後の活躍に期待したい。最後にご助言を頂きました財務省のコーネリア先生に深く感謝を申し上げる。

参考文献：

Bezviconi, Gheorghe G.

1947 Călători ruşi în Moldova şi Muntenia. (Bucureşti).

Bibesco, George (Prince).

1890 Exposition universelle 1889 - La Roumanie avant-pendant-après. (Paris).

Bobulescu, C..

1940 Lăutari și Hori în Pictura Bisericilor Noastre. (Tip.Nationala Jeanlonescu & Company).

Burada,TeodorT.

1974 Opere. (Editura Muzicală a Uniunii Compozitorilor Bucureşti).

Busa, Daniela.

2009(2004) Călători străini despre Țările Române în secolul al XIX-lea.Vol.5. (Editura Academiei Romane,Bucureşti).

2010(2004) Călători străini despre Țările Române în secolul al XIX-lea.Vol.6. (Editura Academiei Romane,Bucureşti).

Carra,Jean-Louis.

1777 Histoiredela Moldavieet de la Valachie. (A Jassy).

Fotino, Dionisiu.
1859 IstoriaGenerala Daciei. (Bucureşti).
L`Union liberale.
1891 LeVoyage En Chine.L`Union liberale. (14 Frburary1891).
Le Parisiene.
1889 Les Etrangers a Paris. Le Parisiene. (12 May 1889).
Neculce, Ion.
1726 Letopisețul Țării Moldovei. (Bucureşti).
Lahovari, Ioan George.
1898 Marele dicţionar geografic al României. (Bucureşti).
V. Cosma.
2009 Bucureşti–Citadelă seculară a lăutarilor români 1550/1950（FundaţiaCulturală Gheorghe Marian Speteanu） p167,p168. Bucureşti.
T.Julien.
1889-07-07 Le Ménestrel : journal de musique. Heugel (Paris).
https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k56212979/f4.image.r=Na%C3%AFou%20(fl%C3%BBte%20de%20pan)?rk=42918;4 p. 212.
T.Julien.
1889-09-01 Le Ménestrel : journal de musique. Heugel (Paris).
https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k56213166/f3.item.r=Na%C3%AFou%20(fl%C3%BBte%20de%20pan) p. 245-246.
V.Cosma.
1960 Figuri de lăutari (book) Chapter: Sava Pădureanu P:115-119 Editura: Editura Muzicală a Uniunii Compozitorilor din R.P. R. Place: Bucureşti.
G. d'Esparbès.
Le Petit Troyen : journal démocratique régional ["puis" journal quotidien de la démocratie de l'Est "puis" grand quotidien de la Champagne] Éditeur : [s.n.] (Troyes) Date d'édition : 1890-10-28.
Le Petit Troyen : journal démocratique régional ["puis" journal quotidien de la démocratie de l'Est "puis" grand quotidien de la Champagne] | 1890-10-28 | Gallica(bnf.fr) p.3.
1890-10-31. Le Petit Troyen : journal démocratique régional ["puis" journal quotidien de la démocratie de l'Est "puis" grand quotidien de la Champagne] Éditeur : [s.n.] (Troyes). http://catalogue.bnf.fr/ark:/12148/cb32837632m p.3.
1890-11-01 Titre : Le Petit Troyen : journal démocratique régional ["puis" journal quotidien de la démocratie de l'Est "puis" grand quotidien de la Champagne] Éditeur : [s.n.] (Troyes).
Le Petit Troyen: journal démocratique régional ["puis" journal quotidien de la démocratie de l'Est "puis" grand quotidien de la Champagne] | 1890-11-01 | Gallica(bnf.fr) p. 3.

V.Cosma.

2009 Titlu: Bucureşti– Citadelă seculară a lăutarilor români 1550/1950 p166-174. Editor: Fundaţia Culturală Gheorghe Marian Speteanu. Place: Bucureşti.

1889-8-20 Newspaper title: Familia Nr.34 Place: Oradea Mare Lăutarii români la Paris. BCUCLUJ_FP_279290_1889_025_34.pdf p10.

1905-11-8 Name of the newspaper : Gazeta Transilvaniei Nr. 244. Place: Braşov BCUCLUJ_FP_P2538_1905_068_0244.pdf P2.

V.Cosma.

1996 Titel: Interpreţi din Romania (book) Page:115-119. Edithor: Galaxia Place: Bucureşti Page. 235.

G,Costescu.

1944 Bucureştii Vechiului Regat : Cu numeroase reproduceri fotografice documentare şi două planşe cu peste 200 de portrete caricaturale ale oamenilor timpului Editură Bucureşti : Editura "Universul".
Bucureştii Vechiului Regat : Cu Numeroase Reproduceri Fotografice Documentare Şi Două Planşe Cu Peste 200 De Portrete Caricaturale Ale Oamenilor Timpului : Free Download, Borrow, and Streaming : Internet Archive p278.

1889-7-26 Name of the newspaper: Tribuna Sibiului Plave: Sibiu. https://adt.arcanum.com/ro/view/TribunaSibiului_1889_07/?query=naiul&pg=85&layout=s p169.

1891-5-21 Name of the newspaper: Tribuna. p.115. Place: Sibiu Expoziţiunea din Praga.

N. A. Popoviciu.

1892-4-28 Name of the newspaper: Tribuna. p.96. Place: Sibiu.

The pan flute is considered one of the oldest musical instruments in the world. The name appears in the Old Testament as the first instrument and it was played by Jubal. This instrument is said to have been played by the faun Pan in Greek mythology, as well. It appears in the antique love story of Daphnis and Chloe, and panpipes of various shapes can be seen all over the world, but in Romania it has been used as a folk instrument "nai". How the pan flute, long forgotten in Europe, was recognized in Romania as a folk instrument "nai"? How did it develop from the 19th century? Focusing on two panflutists, Angeluş Dinicu and Crăciunescu, I'm going to answer these questions.

（本学付属民族音楽研究所講師、パンフルート）